# 最近5年間の本学における臨床検査技師国家試験合格率に影響する因子の解析

研究代表者　後藤　正徳
共同研究者　三村　惠子、川　純一

**研究概要**

前回、本学衛生技術科24～28期生の臨床検査技師国家試験合格率に影響する因子について報告してから早くも5年の月日が経過しました。臨床検査技師を取り巻く環境は、この数年で激変し検査技師の量から質の向上が求められています。国家試験の内容も、それに応じて難易度が増しつつある。そんな状況下で本年度33期生の国家試験合格率が近年に無く低水準に終わった。この低水準であった原因を考えることは今後の本学教育の向上に役立つものと考え、今回分析し考察しました。

【考察】

1）最近の2年間（47・48回）の臨床検査技師国家試験は選択肢の変更、問題形式の変更があり、国家試験のレベルが高くなってきている。国家試験正答率60～80%の問題数が年々低下し、正答率60%未満の問題数が増加してきている。これに伴い臨床検査技師養成学校間合格率の格差が拡っている。

2）全国と本学の問題別正答率の分析から33期生は単に国家試験が難しくなっただけでは説明がつかない。

3）一年次基礎学力のクラスター分析の結果から国試合格率が高いグループの割合が、この数年低下し、逆に国試合格率が低いグループの人数が増加してきている。一方、33期の一年次基礎学力のクラスター分析の特徴として「生物の成績が悪く、化学・数学の成績が優良な学生」が例年と比較して不合格になっているケースが多いことが注目された。本学入学時点の第一志望職種として5分の1が薬剤師を目指していた学生であったというアンケート結果と、昨今の臨床検査技師の就職状況を合わせて考えると勉学意欲が落ちる一つの原因となっている可能性があるのではないか。最近（33・34期生）の学生の特徴として一年次基礎学力が優良でありながら国家試験不合格になった者が増加してきている点からも上記の現象が注目される。

4）1年次の図書貸出数が他の学科と比較しても低いこと、2年次の専門科目を教える時点での中学校・高校レベルでの専門に必要とされる知識量及び質の低下が指摘されている点から、基礎科学知識の充実・科目間の連携、自ら考えて勉強するカリキュラムに変更しなければ国家試験問題の難易度の上昇についていけないのではないか。

5）33期生の国試受験直前にとったアンケート調査により半数の人が国試対策で実施した問題に対して見直しを殆どしていないという驚くべき問題点が判明した。単に補講や試験を実施するのみでなく、その後の対策が今後重要であると考えられる。